

蕉門女流俳人の研究

佐藤 貢

A Study on Bashō's Woman-Dicples

by

Mitsugi SATŌ

第一章 蕉門の人々

私が芭蕉の俳句として、九百八十三句を選定して数年間大学で講義しているうちに、心に浮かんで来たことは、蕉門の人達が芭蕉のどんなところに心がひかれていったのであるかということであった。

そこで私は先ず蕉門の人々にはどんな人がいて、芭蕉からどんな影響を受けて、どんな句を作ったのであるかということに研究を集中していったのである。

そこで研究の第一歩は、蕉門の人々にはどんな人達がいるのかということから研究調査を進めていったのである。

その結果、次の蕉門の人々ということになったのである。

仏 頂 (ぶっちょう)	其 角 (きかく)
東 順 (とうじゅん)	玄 通 (げんつう)
是 橋 (ぜきつ)	巖 翁 (がんおう)
亀 翁 (きおう)	嵐 雪 (らんせつ)
杉 風 (さんふう)	ト 尺 (ぼくせき)
破 笠 (はりつ)	拳 白 (きよはく)
麩 埒 (びじ)	嵐 蘭 (らんらん)
利 牛 (りぎゅう)	孤 屋 (こおく)
路 通 (ろつう)	曾 良 (そら)
千 里 (ちり)	子 珊 (しさん)
桃 隣 (とうりん)	素 龍 (そりゅう)
宗 波 (そうは)	松 江 (しょうこう)
沾 圃 (せんぼ)	琴 風 (きんふう)
介 我 (かいが)	探 丸 (たんがん)
卓 袋 (たくたい)	猿 雖 (えいすい)
土 芳 (どほう)	風 麦 (ふうぼく)
良 品 (りょうほん)	梢風尼 (しょうふうに)
半 残 (はんざん)	陽 和 (ようわ)
車 来 (しゃらい)	荻 子 (てきし)
苔 蘇 (たいそ)	百 歳 (ひゃくさい)
万 乎 (まんこ)	槐 市 (かいし)

雪 芝 (せっし)
非 群 (ひぐん)
配 力 (はいりき)
宗 好 (そうこう)
弘 員 (ひろかず)
乙 由 (おつゆう)
桃 先 (とうせん)
如 舟 (じょしゅう)
野 水 (やすい)
杜 国 (とこく)
史 邦 (ふみくに)
桐 葉 (とうよう)
蝶 羽 (ちょうう)
重 五 (じゅうご)
羽 笠 (うりゅう)
亀 洞 (きどう)
東 藤 (とうとう)
安 信 (やすのぶ)
重 淵 (じゅうしん)
東 鷺 (とうしゅう)
惟 然 (いぜん)
如 行 (じょこう)
斜 嶺 (しゃれい)
荊 口 (けいこう)
千 川 (せんせん)
落 梧 (らくご)
尚 白 (しょうはく)
許 六 (きよりく)
曲 翠 (きょくすい)
萱 泉 (けんせん)
千 那 (せんな)
角 上 (かくじょう)
乙 州 (おとくに)
汶 村 (ぶんそん)
去 来 (きょらい)
千 子 (ちね)
羽 紅 (うこう)
風 国 (ふうこく)
野 坡 (やば)
渭 川 (いせん)

望 翠 (ぼうすい)
杜 若 (とじゃく)
祐 甫 (ゆうほ)
弘 氏 (ひろうじ)
涼 蕙 (りょうと)
白 雪 (はくせつ)
桃 後 (とうご)
越 人 (えつじん)
荷 兮 (かけい)
露 川 (ろせん)
素 覽 (そらん)
知 足 (ちそく)
夕 道 (せきどう)
舟 泉 (しゅうせん)
且 蘂 (たんこう)
祖 月 (そげつ)
業 言 (ぼくげん)
如 風 (じょふう)
自 笑 (じしょう)
支 考 (しこう)
濁 子 (じょくし)
竹 戸 (ちくこ)
怒 風 (どふう)
此 筋 (しきん)
文 鳥 (ぶんちょう)
鷗 步 (おうほ)
丈 草 (じょうそう)
正 秀 (まさひで)
子 葉 (しよう)
洒 堂 (しゃどう)
李 由 (りゆう)
智 月 (ちげつ)
木 節 (ぼくせつ)
木 導 (もくどう)
可南女 (かなじょ)
凡 兆 (ほんちょう)
野 明 (やめい)
野 童 (やどう)
園 女 (そのじょ)
諷 竹 (ふうちく)

舎 羅 (しゃら)	車 庸 (しゃよう)
芙 雀 (ふじゃく)	玄 梅 (げんばい)
北 枝 (ほくし)	牧 童 (ぼくどう)
万 子 (まんし)	句 空 (くくう)
一 笑 (いっしょう)	秋の坊 (あきのぼう)
楚 常 (そじょう)	小 春 (しょうしゅん)
桃 妖 (とうよう)	李 東 (りとう)
浪 化 (ろうか)	路 健 (ろけん)
十 丈 (じゅうじょう)	林 紅 (りんこう)
兀 峰 (こつぼう)	除 風 (じょふう)
朱 拙 (しゅせつ)	助 然 (じょぜん)
紫白女 (しはくじょ)	野 紅 (やこう)
りん女 (りんじょ)	馬 貞 (ばてい)
魯 町 (ろちょう)	牡 年 (ほねん)
卯 七 (うしち)	等 躬 (とうきゅう)
可 伸 (かしん)	清 風 (せいふう)
不 玉 (ふぎょく)	呂 丸 (ろがん)
田上尼 (たがみのあま)	

以上蕉門として 156名の名をあげることが出来る。

次にこれらの人達を地方別に分けて見るとどうなるか。芭蕉の門人の中には行脚のうちに生涯を終わった者もあり、また転移した者もあるが、それらを適宜分類して地方分布図を作ってみると、大体次のようなものになると思うのである。

1. 江 戸

仏頂, 其角, 東順, 巖翁, 亀翁, 嵐雪, 杉風, 卜尺, 破笠, 拳白, 麁罽, 嵐蘭, 利牛, 孤屋路通, 曾良, 子珊, 桃隣, 素龍, 宗波, 沾圃, 琴風, 介我

2. 三 河

白雪と桃先, 桃後

3. 尾 張

越人, 野水, 荷兮, 杜国, 露川, 史邦, 素覽, 桐葉, 知足, 蝶羽, 夕道, 重五, 舟泉, 羽笠且藁, 亀洞, 祖月, 業言, 安信, 如風, 重辰, 自笑, 東鶯

4. 伊 勢

伊勢派をはじめた涼菟, 乙由

5. 伊 賀

探丸, 卓袋, 猿雌, 土芳, 風麦, 梢風尼, 良品, 半残, 陽和, 車来, 荻子, 苔蘇, 百歳, 万乎, 槐子, 雪芝, 望翠, 非群, 杜若, 配力, 祐圃, 宗好

6. 美 濃

支考, 惟然, 濁子, 如行, 竹戸, 斜嶺, 怒風, 荊口, 此筋, 千川, 文鳥, 落悟

7. 近 江

尚白, 丈草, 許六, 正秀, 曲翠, 洒堂, 李由, 千那, 角上, 木節, 智月, 乙州, 汶村, 木導

8. 京 都

去来，千子，可南女，風国，去来一族をはじめ凡兆，羽紅

9. 奈良

玄梅

10. 大阪

野坡，園女，諷川，諷竹，舍羅，芙蓉，車庸

11. 西国

元峰，除風，助然，朱拙

12. 長崎

去来一族の魯町，牡年，田上尼，卯七

13. 北越

北枝，牧童の四兄弟をはじめ，万子，句空，一笑，秋の坊，楚常，小春，桃妖，李東，浪化十丈，路健，嵐青，林紅

14. 東北

清風，不玉，呂丸，等窮

ということになると思う。この中に梢風尼，智月，可南女，千子，園女，紫白女，りん女，田上尼の8名の女流俳人が蕉門下生の中にいるので，次の章からこれらの人について調査研究して見たいと思うのである。

第二章 蕉門女流俳人

第一項 梢風尼

梢風尼は伊賀上野の人で，小川風麦の娘である。同藩の友田良品の妻である。父も夫も共に芭蕉門下の作者で，梢風は夫に先立たれてから俳諧の世界に入っていったのであった。最初は松風といったが，剃髪後は知周尼と号した。

梢風尼は，文台さばきに便利な右の袖を左より短くした褐染の着物を俳諧袖と称して芭蕉に贈ったりしたこともあった。

宝暦8年（1758）3月，句集「木葉集」を編し自序を認めたのが90歳の折のことであった。

この書の中で興味を引かれるものの中に，この書の藤堂白舌の序文に，梢風が洛西の妓女野風に深く契りを結んだことを，おもしろく書かれていたことである。

梢風は気の毒に，この書の刊行を待たずに宝暦8年4月13日に逝去した。

「木葉集」は未塵らが編成した稿本が伊賀に伝わっているだけで，既に成美が「世に流布せず」と「随斎諧話」の中に記されている。

明治の末年に伊賀新聞がこの稿本によって出版，小洒の「蕉門名家句集」にも複製されている。

「木の葉集」は写本1冊で，梢風尼著で，自序，白舌庵馬老人の序がある。洞秋，未塵編で，竹人の跋がある。

梢風尼自選の句集に，甥の未塵や孫の其端らの記憶にあるものや反故の類から選出し，元禄2年霜月良品亭で興行した芭蕉，良品，梢風尼，三園，土芳，半残の六吟歌仙と，芭蕉関係の記事を収められている。

参考文献

木葉集「俳味」三の七。

随齋諧話。

蕉門名家集。

はせを（当年男）

良品「俳味」三の七。

梢風「此原」「姨捨とはず草」

第二項 智 月

智月は天津の人で、川井佐左衛門の妻である。「蕉門諸生全伝」や「俳林小伝」には「何れの御所にか局役を勤め、歌路」と呼んだと記されている。

夫と死別したのは貞享3年であった。乙州の母で、母子ともに芭蕉に学んだのである。

貞享4年には既に尚白編「孤松」に、「つぼみなる梅あたたむる春日哉」外六句が入集されている。

問題は智月がいつ頃芭蕉に入門したかということであるが、「孤松」に入集されたこの頃とみていいと思う。

智月は元禄3年に芭蕉を幻住庵を訪ねているし、その冬には芭蕉が乙州の新宅を訪い、「人に家を買はせて我は年忘 芭蕉」の作があり、ここに越年している。

智月が芭蕉に形見になるものをと希望する、と芭蕉は「六そちの霜にむかふ人に形見を乞はれて、いと力なし。我先にしねとや」と興じて「幻住庵記」を書き与えたのである。

智月は画でも古今女流俳人中の名の知れた人であった。俳諧については許六が「乙州よりはるかに勝れり」と評している。乙州は川井氏で智月の男である。

智月に対して子規は「智月尼は蓮花の如し、清浄潔白にして泥に染まぬ其色、浮世の花とも思はれず」と言ったりしている。

また婦人ながら惟然、路通などを扶助したこともあったりして近江の蕉門に重きをなしていたことも事実である。

宝永3年（1706年）74歳没というのが通説となっているが、この点については疑問がある。

というのは、宝永5年卯月末、大垣の木因が訪ねて来て芭蕉の思い出を話し合い、「芭蕉葉の下に覗くやけふの雨 智月」の句のあったことが「木因紀行」にあるからである。

それ故3年没は誤りということになり、元禄3、4年のころ芭蕉が「六そちの霜にむかふ人」といっているのが、宝永5年には80歳近いことが知られるのである。

俳諧文庫の「元禄名家句集」に、洒竹編の「智月尼句集」があり、小洒の「蕉門名家句集」に俳句が集成されており、森々庵松後の文塚建立記念「夢三年」に、智月の俳文「雀を放つ詞」が収められている。

参 考 文 献

智月像「芭蕉堂歌仙図」

智月を評す「癩祭書屋俳話」

蕉門の女俳人、汐野「俳味」五の七

智月「俳味」瓊音

智月を評す「俳諧問答」

芭蕉に形見を乞う「芭蕉翁行状記」

智月筆蹟「俳諧苔の芝」

智月の画について、松宇「にひはり」九の四

智月筆蹟「芭蕉門古人真蹟」
智月「俳諧名譽談」
智月伝，明治版「蕉門頭陀物語」
智月像伝「好古類纂」
智月の画「にひはり」一の五
智月乙州，晋風「にひはり」一二の三
智月の画，秀麟「にひはり」一二の一〇
智月は川井氏，燕々「懸葵」昭四の一〇
智月尼と錦江女，小洒「ひむろ」七の二
智月の苗字，燕々「ひむろ」三の四
女性と俳句，春風「卯杖」五の八
智月尼従者，燕々「同人」昭三の一
女流俳人，川島つゆ

第三項 可 南 女

可南女は最初は去来の妾であったが，のち正妻に直った人である。徳川時代には習慣として処士などは正式の妻をもたずに侍妾を持っていた者もいたのであった。去来もその一人であったわけである。

許六は「去来誄」の中に「娘の生きき，其の子の母の行末，いかに覚東なく見果つらん」と記述している。

とみ，たみの二女は幼弱であったので，去来は心もとなく思ったことであろう。

去来の没後は貞従尼（貞松ともいった）と号し，そ老後は去来の兄元端の息，元柱が養ったのである。

その作品は「罌粟合」以下諸集にあるが，小洒の「蕉門名家句集」に集成されている。享保18年（1733）に没した吾仲の追悼集「秋の名残」に「吾仲老人のいたみ」の文を草し，終わりに「去来室可南尼」と署名している。

享没の年ははっきりしていないが，70歳近くであったらしく思われる。

参 考 文 献

去来伝書のこと「随斎諧話」
可南女のこと，洒竹「俳味」四の八
蕉門の女流，汐野「俳味」五の七
女流俳人，川島つゆ

第四項 千 子

千子は元升の第三女で，向井氏，去来の妹で，通称千代といい，長崎の御船手清水藤右衛門に嫁していった。

千子は貞享2，3年の頃，去来の伴に伊勢神宮に詣で，その紀行の句文の批点を芭蕉に請うている。

「続虚栗」「曠野」「猿蓑」などにその句を散見することが出来る。貞享5年（1688）5月15日に没した。

「とまりとまり稲すり歌も替りけり」は，伊勢紀行の折の作品で一般によく知られているも

のの一句である。

参 考 文 献

千子の辞世「いつを昔」
蕉門の女俳人，汐野「俳味」五の七
女流俳人，川島つゆ

第五項 園 女

園女は斯波氏で，伊勢山田の神職秦師貞の女である。医家斯波一有（渭川）に嫁した。曠野，嵐雪の其袋，許六の歴代滑稽伝，などに一有の妻と書かれている。

宝永2年（1705）成稿の「菊の塵」の中に，元禄2年の冬俳道に入り，翌3年芭蕉に入門したことを自ら記している。その入門の時，芭蕉は「暖簾の奥ものゆかし北の梅」と詠んでいる。

園女の句作生活は芭蕉に入門以前からであったことは，元禄2年の「曠野」，3年の「其袋」の二十余句を見ることによって証明されるのである。

元禄5年8月に夫妻は大阪に移住し，医業の傍ら俳諧及び雑俳の点者をもしていたのである。元禄7年9月末日に芭蕉が訪れて「白菊の目に立てて見る塵もなし」とその貞淑さをたたえているのであった。

元禄16年（1703）7月には渭川が没し，宝永2年（1705）江戸深川に移住し，夫の遺業眼科医と点業に従事し，其角の推挽で冠里侯の知遇を得ていたのであったが，病気がちになったので，享保3年剃髪して，智鏡尼と号することになった。

その時，唯一神道家の出であることをはばかって，頭に十筋ばかりの髪を残していたと言われている。

「菊の塵」を読んで感じたことは，雲虎和尚との問答などもあって，園女は多少禅の修行をした女性ではないかとも思われる。

園女は享保11年（1726）4月20日63歳で没。深川霊岸寺中の念仏堂に葬られて，法号は林光院遊誉称詠妙園信女となっている。

参 考 文 献

園女（富士を見るため永代橋を渡る）「俳諧十三条」
園女は蕉門の出でない「松のそなた」
俳諧海内人名録
園女を讃する西鶴の文「菊の塵」
園女の詩（雲虎和尚に答える）「菊の塵」
園女，荘司「俳諧評論」39
その大和行「其袋」
園女を評す「俳諧漫話」
癩祭書屋俳話
園女の信仰（雲虎和尚へ答える）「菊の塵」
園女「蕉風」瓊音
園女は一有の妻「歴代滑稽伝」
園女系「綾錦」

園女筆蹟「にひはり」一〇の四
 園女「日本女学史」
 園女渭川「俳諧名譽談」
 園女について「ほととぎす」七一一の一
 渭川と園女，洒竹手記「俳味」五の三
 園女筆蹟「元禄名家句集」（俳諧文庫）
 園女，素琴「国語と国文学」八の三
 園女歌集より，三鳥子「木太刀」二三の三
 園女と一有，一外「木太刀」二三の四
 園女考，一外「にひはり」一の八
 「俳味」三の七，海竹「多代女のこと」の中に説がある
 園女伝，晋風「にひはり」一二の五
 園女惟中，紫影「にひはり」一三卷
 園女と句，真名井「俳味」三の七
 園女伝と句風，はるを「ひむろ」一の二
 園女と「菊の塵」，素琴「東炎」四の一二
 「菊の塵」の誤り，「東炎」六の四
 園女論，かをり「石楠」昭五の五，六
 園女研究，錫杖「俳星」昭七の一，二
 園女筆蹟「芭蕉門古人真蹟」
 園女像讚「好古類纂」「一有」「其袋」
 一有「俳味」五の七

「菊の塵」半紙本二冊。園女編。自席。素堂跋。江戸吉田宇右衛門版。芭蕉の「白菊の目に立てて見る塵もなし」を発句に，園女、渭川，諷竹，惟然，支考などで巻いた歌仙，渭川，園女一座の歌仙，其角，嵐雪，冠里，鬼貫，智月，任口など談林，蕉門名家の発句，宗鑑以下の古句，西鶴の句文，蕉門の人々が伊勢の名勝を詠んだ句などを収める。女流諸書の白眉と称され，編成は元禄16年から宝永2年までの間（「東炎」四の一二）であり，師の芭蕉の句を余人の作として入集していること（「東炎」六の四）その他について素琴の研究がある。

「鶴の杖」は半紙本一冊。園女編。自席。琴風跋享保8年（1722）刊。

園女の60賀，並びに剃髪の際に諸家から贈られた連句，発句を収める。琴風の跋は園女伝として正確な資料である。集中の作家に冠里，沾徳，敬雨その他江戸の名家が多い。

第六項 紫 白 女

紫白女は，肥前田代の人で，寺崎一波（平八）の妻である。初め糸白と号し，失拙の教えをうけるに至って紫白と改めたのであるが後には野坡門に帰した。

作品の初見は，元禄10年晡扇編の「染川集」で，かの女の独吟表六句が二つ収録されている。

元禄12年日田の朱拙す行脚して博多にあるのを訪ね，田代への曳杖を懇請した結果，朱拙は田代に行き蕉風俳諧を説いたのであった。

元禄13年には「菊の道」が出版された。この辺鄙な地の一女性の編著が，井筒屋という代表的書林から出版されたのであり，その内容も堂々たるもので，当時の俳壇を驚かしたであろう。

紫白女はよく旅行して句をとどめているが，行脚俳人もまたよくかの女の許を訪ねている。

富裕で理解ある夫との円満な生活がしのばれる。

享保元年（1716）には露川が燕説を伴って訪ね、「高砂に並ぶ齡ひや檻の花」とそのめでたい対偶を祝えば、かの女は「涼しさや二人とふたり物がたり」と式礼している。今まで多く日田の人また豊後の人と伝えられていたが、田代が正しいようである。

井筒屋の出版目録に「菊の道、豊後紫白女」としているのは、数回出版して交渉の深い朱拙が日田人であり、この人が後見で交渉に当たったからの誤りであろう。

享没年は未詳であるが、享保元年（1716）に露川の訪問をうけて同4年の「天上守」に「亡人紫白」とあるから、享保2、3年まで生存していたことは明らかである。

参 考 文 献

女流俳人，川島つゆ

紫白女は一波の妻，麦人「木太刀」三二の四

九州蕉門俳諧史概説，杉浦正一郎「文学研究」49

寺崎紫白女，松本義一「別府大学紀要」二

俳人四方郎朱拙の研究，大内初夫「佐賀竜谷学会紀要」四

紫白女，晋風「にひはり」一二の五

「菊の道」半紙本二冊。紫白編。朱拙序。元禄13年（1700）刊。京都井筒屋版。上巻には風国，洒堂，土芳，猿雖，露川，惟然など，各地の蕉門名家の俳句がみられ，下巻には連句を収めているのである。

女流俳人撰集の最初のものでされて，資料的見地から見ても価値の認められるものと言ってよいと思われる。

第七項 り ん 女

りん女は，野紅の妻である。筑前秋月の医者遠山柳山の女である。夫と共に俳諧に遊び，号も，りん女，林女，りん婦，綸女婦などと署名を書いている。

庭前に藤の老株があって，藤の井とも称したりしていた。元禄10年其角編の「錦繡綴」に，りん女の句を見ることが出来る。この年24歳の筈である。

俳諧は野紅の感化と野坡などの教えも受けたであろうと思うが，その盛名はむしろ夫の野紅を凌ぐものがあつた。

元禄14年田代の晩柳編「放鳥」を見ると「いなつまやいたり来りて夜を明す りん女」の句に「野坡は此句は豊後の野紅子が妻の吟なるよし，秀逸ままきこえ侍る中にも，ただなくいひながし，見るにまばゆく，おもふにふかし」云々と称揚し，「いなつまを押えて涼しくれの雲」の句を添えている。

編著に稿本「紫藤の井」「若草」「歌仙貝」などあり，一代の作は野紅と共に小洒の蕉門名家句集に収められている。

宝暦7年（1757）3月21日没年84歳であつた。

参 考 文 献

三日の庵（野坡追悼集）

野紅稿本若茶，侍巾「ひむろ」一〇の一

倫女の諸国風念会巻写，侍巾「ひむろ」一〇の三

倫女の夢想首尾歌仙，侍巾「ひむろ」一〇の四

九州蕉門俳諧史概説，杉浦正一郎「文学研究」四九

野紅及び倫女のこと「秋風庵文集」

野紅，柿紅「天の川」

第八項 田 上 尼

久米七郎左衛門利延の妻である。田上尼と称せられたのは、長崎港と茂木港との中ほど、田上の勝景地に千載亭を結んだのにより田上尼と称するようになったのだといわれている。

蓑田氏の出で、去来の弟の牡年の養母であり、卯七の叔母に当たるのである。

夫の利延は、島原の乱鎮定に出陣して負傷してのち筑前の黒田藩に仕えた久米諸左衛門家治の子であった。

去来は、ここに遊んで「千載亭記」を草して、卯七や魯町の縁辺の者をはじめ、惟然、支考また野明など多くの元禄俳人がしばしばここに足を運んでいるのである。

田上には風光絶佳で、有名な唐八景があるのである。尼は享保4年（1719）正月没。年齢75。本蓮寺に葬られた。

参 考 文 献

去来とその一族，渡辺庫輔「向井去来」

去来雑考，渡辺庫輔「俳諧雑誌」四の一より五の三号まで

去来をめぐる人々，大内初夫「佐賀竜谷学会紀要」五

九州蕉門俳諧史概説，杉浦正一郎「文学研究」四九

第三章 蕉門女流俳人の代表句

A 智月の句は、炭俵，玉藻，故続五百，古選，類題，有磯海，続猿蓑，曠野，奇談，故五百卯辰，小文庫，猿蓑などの句集の中にあるが、私はそのうち智月の句の代表的名句を選び出して、解説することにしたのである。

1. 鶯に手もと休めむ流し元

この句は「続猿蓑」にあるが、元禄7年頃の作といわれているが年代の確証資料が得られないのが残念である。

流し元とあるから、お勝手の流しのある所である。この句の意味は、お勝手に立っていると、鶯のなき声が聞こえて来たのである。おやと思つて、流し元で食器を洗う手を休めようとするというのである。

さすがに女性らしく現代の所謂台所俳句作者らしく思われるものがある。この句を鑑賞するある人達は「手もと休めむ」というのが聊かきざであるという人もいるのである。

2. 年よれば声は嗔るるぞきりぎりす

この句は元禄6年頃の作品で「炭俵」の中にある。

一句の意味は、秋もたけなわとなつて、きりぎりすの鳴く音が弱つて来た。年をとると、虫ならぬ人の声も嗔れて来て、老いの身がしみじみと感じられるというのである。

この句は晩秋に鳴き弱つて来た虫の音に寄せて老懐を吐露した句である。人と虫とが一体になったという感じがするのである。作者の心の底からにじみ出ていて重みをもって響いて来るのである。

智月の代表作品と言つてよいと思う。「俳諧古選」「類題癸句集」などを見ると、「声も」とうい形になっている。

3. 独り寝や夜わたる男蚊（をか）の声佗びし

この句は貞享3年の作品で、「孤松」に載っているものである。

一句の意味は、さびしく独り寝をしていると、プーンと夜の闇を妻を求めて飛ぶ蚊の音が、わびしげに聞こえてきたというのである。貞享3年という年は智月にとっては夫に死別した年であった。

夫は河合佐右衛門といい、大津で伝馬役、問屋役を勤めた人であった。夫を失った後の独り寝のさびしさを句にしたもので、蚊のわびしい鳴き声を聞くにつけて、これからのわが身を思っ、亡き人をしのぶせつない女心が表われている句である。

4. 待つ春や氷にまじる塵あくた

この句は、元禄6年頃の作品で、「炭俵」に載っているものである。

一句の意味は、水面に張った氷の間に塵芥の類がまじって見える。もう春が近づいて、寒さもゆるんでいるようだということである。

作者は何でもないちょっとした事物を見ても春のけはいを感じる女流俳人の気持ちの動きがあらわれている。

一見洵に平板な外見の底に、いかにも女性らしい清澄な俳人の眼が光っている作品と言えようと思う。

5. 見やるさへ旅人寒し石部山

この句は元禄3年の作品である。「卯辰集」に載っているものである。

石部山というのは、滋賀県甲賀郡石部付近の山である。石灰を産するので、土が白色で荒れ、草木も乏しいのである。

この句には「路通の行脚を送って」という前書がある。

一句の意味は、石部山のあたりに行く旅人の姿は、遙かに見送るだけでもいかにも寒々としているということである。

蕉門の中で乞食路通といわれていた漂泊の俳僧が旅立つのを見送った折の吟詠である。

あれた山肌をさらす石部山は、冬枯れの頃ともなれば一入荒涼としていたものと思われる。とぼとぼと歩いて行く後ろ姿を見送るのに、それは格好の背景をなしているのである。

玉藻集には上五のところ「見ゆるさへ」と伝えられているのは誤りとすべきである。

6. 麦藁の家してやらん雨蛙

この句は元禄4年頃の作品で「猿蓑」にのっている。「孫を愛して」という前書がある。一句の意味は、孫が雨蛙を捕えておもちゃにしているのを見て、その雨蛙に麦藁のお家をこしらえてやろうと言ったのである。

西鶴の好色一代男の巻二のはじめに、「折しも麦も秋のなかば、から竿の音のみ。里の童部、ねぢ籠、あまがへるの家などして」とあり、当時の子供の遊びのさまをうかがうことができるのである。

智月は芭蕉より10歳も年長者であったから「猿蓑」当時はもう60歳に近い年齢であったわけである。

可愛い孫と遊んで童心にかえった作者智月の心のはずみが、そのまま句になったという感がするのである。

なお「葛の松原」には「麦がらの家してやらむ雨蛙」という形になって雨蛙に「アマガヘル」というふりがながついている。

7. 山桜散るや小川の水車

この句は、元禄6年頃の作品である。「薦獅子」の中に載っているものである。

一句の意味は、さらさらと流れる小川にかかる水車は、終日ゆるやかにまわりつづけて今を盛りの土手の山桜が、はらはらと散りかかるというのである。

これは村はずれなどによくありそうな景色である。空は明るく晴れていて、風もおだやかな春たけなわといった情趣が味わえるものである。

この句などは初歩の人に俳句の見本として示すのに、空の青を映す水に、白い花びらが浮いて流れて行く有様は、はなやかな色彩観もあって、格好の句といえると思う。

8. やまつつじ海に見よとや夕日影

この句は元禄4年頃の作品で、「猿蓑」にある。

一句の意は、海岸の近くに山つつじがいっぱい咲いている。そこへ夕陽がさして一層鮮やかな色彩になったが、まるで夕日は海に向かってこの美しさを見て下さいと言っているようだというのである。

この句は海辺近い山の斜面などに咲いているつつじの美しさを詠んだものと思われるのである。

智月は大津の人だったから、湖岸の景色かも知れない。とにかく色彩がはなやかで印象が鮮明な句である。

が、然し、「海に見よとや」という表現とはひらき直って見ると、技巧とは別の一種の「はからい」が感じられる。

B 園女の句は、陸奥衛、菊のちり、小弓誹諧集、住吉物語、其袋、曠野、玉藻、故続五百、故五百、類題、明題集などに散見している。

9. 負うた子に髪なぶらるる暑さかな

この句は、元禄10年頃の作品で、「陸奥衛」に載っている。

夏の暑い時、女性の豊かな髪はただでさえうるさい感じのするものである。その上に頭はない子をおぶって、その子にうしろからさわられるのは、何と暑苦しいものであると言うのである。

暑さの捉え方として、この句には女性独得のものがあり、そのため園女の句の中では最も人に親しまれているものとなった。

10. さゆる夜のともし火すごし眉の剣

この句は、宝永2年頃の作品で、「菊のちり」にのっている。

眉の剣は、剣のように鋭い眉という説もあるのであるが、ここではそうではない。何となくけわしい顔つきを「陰がある」などという意のその陰の宛字とすべきである。

一句の意は、しんしんと冷えて来る冬の夜のともし火は、何処となく凄い感じがある。その灯影に映し出された凄艶な女性の顔。来ぬ人を待ってじれているのか、眉のあたりに陰のあるけわしい顔つきをしている、と言うのである。

この句は、恋と題した中にある作品だから、その意を含めて解釈すべきである。冴えわたる夜にともした孤燈の光は、それだけ物凄くものであるが、そこに眉を寄せた美人の陰のある顔が点出されると、その情景は一層凄艶を極めたものになる。

人を待つ思いに来ぬ人を怨む場面であろうが、表現としては何となく鋭さに乏しく、むしろたどたどしいが、癸句には珍しい題材を採りあげたものである。

11. 大根に実の入る旅の寒さかな

この句は、元禄4年以前の作品である。「小弓俳諧集」にのっている。

「伊勢にありつる頃、美濃へ旅立つ事侍りてと前書がある。

一句の意は、大根に実が入って取り入れ時になると、旅の寒さが一身にしみることである、というのである。

美濃（今の岐阜県）には大根畠が多い。その取り入れ時は寒さも殊にきびしくなってくるのである。

この句は、道すがらの所見から美濃路の旅情をみごとに具象しており、芭蕉の「身にしみて大根からし秋の風」の句を想起させさせるものがある。

12. 竹の子に小坂の土の崩れけり

この句は、元禄7年頃の作品で、住吉物語の中にのっている。

一句の意味は、竹藪に沿うた、ちょっとした坂路にかかると、道ばたの土が少し崩れている。よく見ると、竹の子が出ているからであった、と言うのである。

かわいらしい竹の子を見て、ふと和む気持ちに、季節感が十分に味わえるものがある。こうした表現は、俳諧独特のものであるとっていいであろう。

13. 手を延べて折り行く春の草木かな

この句は、元禄3年頃の作品で、「其袋」に載っている。「同じ野中より駕籠にかき寄せられて」と前書が書かれている。

園女が大阪に出る前、まだ伊勢にいた頃、夫の一有と、春の大和路を旅した時の作である。この旅行は園女の伊勢在住時代の最も楽しい思い出であったろうと思う。

いろいろな資料を見ると、この人は男まさりの婦人だったようであるが、さすがにこういう句では、旅へと心がはずむ軽快明朗な気分とともに、女らしい情緒が感ぜられるのである。

なお「玉藻集」には下五句を「木草かな」の形となっている。

14. 鼻紙のあひにしをるるすみれかな

この句は、元禄7年頃の作品で、「住吉物語」に出ている。

一句の意は、ふところの鼻紙を取り出して何の気なしに開いて見ると、しぼんだすみれの花が出て来た。ああ、あの時摘んだまま忘れていたのだった。こんなにしておれてしまっていて可哀そうにというのである。

いかにも女らしい気持ちの動きをあらわした、風情のある句といえると思う。

「俳諧百一集」「類題癸句集」などには、中七を「間にしぼむ」としている。

15. 春の野に心ある人の素顔かな

この句は、元禄2年頃の作品で、「曠野」の中に載っている。

一句の意は、春の野に遊ぶはなやかな人々にまじって、化粧しない素顔の人がかえって目立ち、心あり気に見える、言うのである。春の日ざしは、暖かに野遊びに化粧した顔は多いが、こうした時候にはかえって化粧しない顔が自然で美しく見えるというのである。「曠野」では恋の部の冒頭にあり、「心ある」は教養があって風雅を解する意であるが、全体に恋の心を含めて解すべきである。

註（以下頁数の都合で省略）